

ローマの休日 あれから50年、青春がよみがえる
株式会社建設技術研究所 北海道支社/環境プロジェクト室/室長 小松 豊



■新聞記者ジョー(グレゴリー・ベック)と王女アン(オードリー・ヘプバーン)の再会の場 ここからローマを舞台として物語が繰り広げられる

名作「ローマの休日」は1953年のアメリカ作品、日本公開は1954年4月。オードリー・ヘプバーンの本格的デビュー作である。オードリー・ヘプバーンはこの一作でアカデミー主演女優賞を獲得、押しも押されぬ世界的な大スターになった。はっとするような美しさ、あどけなさ、初々しさ、その全てが印象的である。共演する新聞記者役のグレゴリー・ベックのすがすがしさもたまらないし、こっけいなカメラマン役のエディ・アルバートの名演技もすばらしい。グレゴリー・ベックが去年死去し、公開から50年の歳月が流れるが、今みても心がときめく作品であり、その新鮮さは変わらない。

1953年といえば、日本は、朝鮮戦争による好景気を迎え、その3年後には「もはや戦後ではない」と経済白書でいわれた時期でもある。

この映画の公開当日、東京日比谷の映画館前にはオードリーと同じショートカットの女性が長い列を作り、超満員だったと言われている。

この映画のおもしろさ、すばらしさは、オードリー、グレゴリー、エディーもさることながら、イタリア市民を演じる脇役の俳優達の演技力による所が大きいとも言



■写真1—スペイン大使館があったためスペイン階段と呼ばれた

える。タクシーの運転手、花屋の主人などに人間の素朴さや優しさを演じさせている。スペイン階段で「お金がないので花は買えない」というアン王女に、商売上手の花屋の主人が1本の花をプレゼントするシーンは、「人間はやさしさを忘れてはいけないよ」と言っているようでもある。

監督はウィリアム・ワイラー。映画界の巨匠であり、この時51才。人間の動作や表情を、細やかにかつきいきと表現している。

物語は、ローマを親善訪問中のヨーロッパの小国の王女アンが、多忙な公務に嫌気がさし、こっそり大使館を抜け出して、ジョーと知り合い、恋が芽生えるものの、結ばれない運命と知りつつ別れるというもの。

映画は全てローマで撮影を行ったもので、歴史ある土木施設や建築物がふんだんに取り入れられ、この映画をより魅力のあるものに仕上げている。映画の舞台となった主なものを以下で紹介する。

●**トレビの泉**：古代ローマでは、大きな水道の最終放水口に人目を引く噴水を造る風習があった[アンは、この泉の横の美容院に寄って長い髪を短くカットした]。

●**スペイン階段**：スペイン階段のある場所は、昔は崖で、階段の上にあるトリニタ・ディ・モンティ聖堂との行き来を可能にするために、西暦1723年に階段が作られた。この階段の下にスペイン広場がある。かつて、ここにスペインの大使館があったため、スペイン階段と呼ばれている[アンとジョーが再会した場所。ここから2人の楽しいローマ見物が始まる]。

●**コロッセオ**：コロッセオは古代ローマ帝国時代の円形闘技場の通称で、ローマ帝国最大の建造物。剣闘士や猛獣の戦いを行った[アンとジョーがベスパに乗ってでかけた場所]。

●**サン・タンジェロ城**：2世紀頃、皇帝の墓として造られたもので、6世紀頃ここに天使が現れペストがおさまったことから、サン・タンジェロ(聖天使)城と呼ばれる[川辺のパーティー会場となった場所。秘密探偵に見つかり大乱闘の末、2人はテベレ川を泳いで逃げる]。

ともかくにも、「ローマの休日」はいつ見ても、心ときめく楽しい名作です。たまには、ゆっくり映画をみるのも良いものです。

(写真：小松豊)

(参考文献)
ローマの休日、パンフレット、東宝株式会社事業部、1977
地球の歩き方ポケット(15) イタリア2003~2004年版、株式会社ダイヤモンド・ビッグ社、2003/3/21
週刊ユネスコ世界遺産 第8号 ローマの歴史地区3 カラカラ浴場とパンテオン、株式会社講談社、2000



■写真2—観光客でにぎわうトレビの泉



■写真3—コロッセオはローマ帝国時代の円形闘技場



■コロッセオを見物するアン王女



■写真4—2世紀頃、皇帝の墓として造られたサン・タンジェロ城



■テベレ川のパーティー会場へ向かう二人、奥がサン・タンジェロ城